AALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan
July 2023　No. 62

◎ 2023 年 5 月 8 日より、新型コロナウィルス感染症の位置づけが「５類」に移行し、徐々に規制が緩和されつつあります。今夏は、遠方に足を運ばれた方もいらっしゃるのではないでしょうか。*AALA News* 第 62 号は、2022 年度の例会の発表要旨を掲載しております。2022 年度の例会は全て Zoom を利用したオンライン開催となりましたが、前年度よりも多くの発表を実施することができました。またより多くの方にご参加いただけたのではないかと思います。今後の例会発表について、何かご希望等ございましたら、随時事務局までご連絡ください。

◎ 第 31 回 AALA フォーラムのプログラム及び申込方法を同封しております。第 31 回 AALA フォーラムのテーマは、「アジア系（アメリカ）文学研究と翻訳」です。2023 年 9 月 24 日（日）にハイフレックス（対面の会場は神戸大学）で開催される予定です。皆様、どうぞ奮ってご参加いただきますようお願いします。

（文責： 松本）

例会報告要旨

◇第 144 回例会（2022 年 7 月 16 日、Zoom を利用したウェブ開催）

「非規範的な生を渇望して—Yiyun Li, “After a Life”におけるクィアとその他の周縁化された登場人物たち」

井上明紀（都留文科大学[院]）

本発表では Yiyun Li の短編“After a Life”を取り上げた。「非規範的な生」という観点から、登場人物たちの「生」を困難にする要素を明らかにすることを目的とする。具体的には障害とクィアを軸に、登場人物たちがどのような「非規範的な生」を生きざるを得ないのか、あるいはどのような「非規範的な生」を欲望しているのかを分析した。

本発表では「非規範的な」という言葉は、「健常な身体」から外れた貝貝、娘の介護（ケア）を行う蘇夫妻、エイブリズムを内包した蘇氏、「犯罪者」としてスティグマ化された方夫人、婚姻制度に対してラディカルな発想を持つ方氏ら、登場人物たちの生き方や欲望を指し示す。またクィアという言葉は、「正常」とされる、男女二者間における排他的で永続的なパートナーシップを形成し、社会に広く受容される家族の形成に結びつく性的指向および欲望から外れたもの、として扱った。

本作品の主要登場人物たちは、沈黙している、あるいは沈黙を強いられている側面がある。これらの人物たちがそれぞれに沈黙する部分があるのは、社会規範や偏見によって周縁化されているからである。その分析として、障害およびクィアネスに着目した。まず、障害について分析する。ケアラーとしての蘇夫妻の負担についても、親族の頼れなさ、医療へのアクセスが制限された状況という観点からそれぞれ検討した。次に、登場人物が内包するエイブリズムの問題についても分析した。発表の最後には、クィアな欲望について検討した。方氏には愛情を向ける妻がおり、その傍ら恋に落ちた別の女性がいる。方夫人に打ち明けた三人で暮らすという提案は、既存の単婚主義的な社会規範、法制度に対する挑戦的な発想として解釈できる。

このように、障害とクィアを軸に本研究は“After a Life”を分析した。周縁化された人物たちの生き方の可能性と、それらの「非規範的な生」に対して社会規範や偏見がどのように抑圧として作用するかという視点は、マイノリティを多く描いている Yiyun Li の作品分析に有効であると考える。今後は Yiyun Li の他の短編作品にも分析対象を広げて研究を進めていきたい。

「Julie Otsuka の短編“Diem Perdidi”における失われゆく記憶をめぐって」

小谷真由（神戸大学[院]）

Julie Otsuka は 1964 年に California 州 Palo Alto で、日系一世の父と、二世の母の間に生まれた。Otsuka 自身は他国に移住することの困難や、太平洋戦争によって強制収容される苦難を経験していない世代でありながら、彼女の作品にはそのようなテーマを取り扱っているものが多く、自分の経験したことのない日系アメリカ人としての集合的記憶を書き込むことを試みる Otsuka の姿勢がうかがえる。

本発表で取り上げた、*Granta* 117 号に掲載された Otsuka の短編小説 “Diem Perdidi” (2011) は、作品のほぼすべてが、“She remembers” もしくは “She does not remember” から始まる文で構成され、物語の進行とともに彼女の人生が明らかになっていくという形式を取っている。なおこの主人公の女性は、Otsuka の、認知症を患った母がモデルとされており、この人生には、戦争体験といった日系人の集合的記憶に分類されるものから、結婚、出産といった、彼女にとっての個人的記憶も含まれる。 “Diem Perdidi” はラテン語で、 “I have lost the day” という意味であるが、本発表では、日々の喪失を示唆するタイトルが付けられていることに着目しつつ、作品の進行とタイトルとの関連から分析できる、本作品が示唆する記憶の継承への可能性を考察する。

作品における忘却の描写を詳細に分析すると、主人公の女性の経験した出来事が、彼女の記憶として描き出されることで、忘却が、物語として記憶を再構成して語ることをいかに困難にさせているかがわかる。まさに、記憶されている日々が失われていることに対する憂いを読み取れるのである。しかし、 “Diem Perdidi” というタイトルが作中で登場する文脈や、記憶の細部が失われていく叙述に続く作品最後の一文で、それでも彼女が覚えていることが記されていることに着目すると、記憶をとどめておくことの限界だけでなく、記憶の継承の可能性を書き込もうとする意志を読み取ることができる。

さらに、本作品における “She remembers / does not remember” の形での記憶と忘却の繰り返しは、他者がある出来事を経験した当事者の記憶と忘却の痕跡を聞き取り、代弁して語るという行為が、作品内において反復されているということである。他にも作品内では、主人公の女性の習慣が強調されている。習慣が行動の反復であることは言うまでもない。主人公の女性の記憶が、他者によって反復されることで集合的記憶の一部となり継承されていくことの可能性と期待を、本作品は提示していると言えるだろう。

「金韻梅が描いたハワイのチャイナタウン—小説『家族の栄光』について—」

林 麗婷（立命館大学[非]）

本発表は清末から民国にかけてアメリカ・中国で活躍した女性医師である金韻梅（Yamei Kin,1864-1934）の唯一の小説“The Pride of His House: A Story of Honolulu's Chinatown,”（*The Overland Monthly*, Feb.1902）（『家族の栄光』）を取り上げて、彼女が描く華人の表象を検討したものである。まず、*The Overland Monthly* に描かれる華人男性の表象を踏まえ、従来 Ah Sin という名前で語られてきたステレオタイプの中国人との関連性を指摘し、アジア系アメリカ移民が抱えた「人種的去勢」の問題を確認した。そして、19 世紀末のハワイにおける華人社会と本土の違いに着目し、『家族の栄光』の背景には、移民することに伴い従来の大家族から核家族へ移行する新しい家族形態がハワイの華人社会に存在したことを指摘した。

次に『家族の栄光』に描かれる Ah Sing（Ah Sin ではない）の造形を分析した。アーシンは成功した商人で、英語を学ぶなど、積極的に西洋社会に馴染もうとする設定である。しかし金韻梅が描いたアーシンの部屋における東洋と西洋とのコントラストを通じて、身を置いている西洋文化の日常への傾倒と、中国文化の伝統と教訓に従おうとする思いに由来する彼の精神的葛藤を強調した。小説は子供がいない華人夫婦がどのように折り合いをつけて妾を迎えることになるかをめぐって展開されるが、近代家族のありかたに心を寄せながらも先祖の意識に引きずられた主人公たちの苦い思いを巧みに表現した点こそにこの小説の醍醐味があるだろう。特に金韻梅は、環境描写および人物の動作、心理描写などを通じて主人公の動揺ややるせなさを表現しているのである。また『家族の栄光』において最も特筆すべきは中国の女性を描き出したことである。祖国から遠く離れながらも先祖の教訓に従い夫に妾を見つけて子供を産ませたことは一見伝統中国の「三従四徳」そのものであるが、夫に対する愛の自覚や、「愛と犠牲の子供」であることに対する認識から、伝統的な大家庭から女性が脱出して微かでありながら変化していっていることを読者に感じ取らせるだろう。それは、ディアスポラの女性が獲得する解放と自由の可能性をほのめかす。また、妾にさせられた女性に対する描写から、金韻梅の彼女に対する同情も読み取れた。

最後にユウラジアンの女性作家であるスイシンファーに関する研究を踏まえ、金韻梅の創作をトランスボーダー文学の視座で考えることの可能性を探った。イーディスが創作において中国人移民や混血の主人公を多く登場させて中国人家庭を描き出したことは、金韻梅『家族の栄光』との間に共通点を持っている。二人の創作を並置することで、越境を経験した女性の人種・ジェンダー・家庭・階級に対する態度について考察することを今後の課題としたい。

◇第 145 回例会（2022 年 11 月 26 日、Zoom を利用したウェブ開催）

Redefining Domesticity in Margaret Dilloway's *How to Be an American Housewife*

李 一旻（神戸大学[院]）

Domesticity is an ideology dominated by the White-middle-class in the United States. During the 1950s-1960s, the heyday of the nuclear family, domestic novels represented the American family life centered on the life of American housewife, which reflected the "American Family" myth based on the ideological formation of "American Dream." However, Margaret Dilloway tries to redefine the domesticity dominated by White-middle-class through her domestic novel *How to Be an American Housewife* (2010). In this novel, each chapter begins with a quote from the fictional conduct book *How to Be an American Housewife* which is also the title of the novel. The same title fictional conduct book embedded in the novel is similar to early Asian immigrant writings, for example, the *Chinatown Family* (1936) by Lin Yutang(林語堂), as guidebooks to introduce the American life for Asian immigrants, moreover, modifying the White-dominated ideology of the "American Dream" to Asian version. Margaret Dilloway portrays the American life of Japanese immigrant women by means of a conduct book to redefine the White-middle-class-dominated domesticity to Asian immigrants' version, and critiques the White-middle-class-dominated concept of "American Family" myth based on the ideological formation of the "American Dream."

This presentation discusses Margaret Dilloway's novel *How to Be an American Housewife* from the two thematic viewpoints. Firstly, it combines the transformation of family structure and marriage of two generations of Japanese American women in the novel to analyze the decline of the "American Family" myth from the 1950s to 1990s from the perspective of economy, society and culture. Secondly, it analyzes domesticity in terms of the Japanese American housewife's family life portrayed in the novel, which shows that as both a first-generation immigrant and an American housewife. The main character Shoko is confined to her household not only due to the "American Family" myth requiring the wife to stay at home to take care of her family and do house chores but also due to the concept of domesticity as a cultural/national marker distinguishing Japanese American Shoko from the white inhabitants of her local community in America.

In conclusion, through the process of redefining domesticity in this novel, recognizing not only American culture in the life of Asian immigrants but also the pressure of traditional Asian culture under the dominance of white Americans, this presentation endeavors to find a solution

for problems caused by cultural integration forced by white-dominated America.

"Heterotopias" in Toni Morrison's *Paradise* and Maxine Hong Kingston's *Tripmaster Monkey*

王 玲玲（大阪公立大学[院]）

This presentation explores the concept of "heterotopia" in Toni Morrison's *Paradise* (1998) and Maxine Hong Kingston's *Tripmaster Monkey* (1989). Through the lens of Foucault's "heterotopia" theory, this study examines the intersections and differences between these "heterotopias" and their role in challenging discrimination and promoting equality in a globalized era. Both of these works create "heterotopias" as compensatory spaces for marginalized groups who lack representation in the dominant culture of American society. Morrison's Ruby and the Convent and Kingston's Pear Garden offer a sense of existence and expression for black people and Chinese Americans respectively.

In *Paradise*, Morrison depicts a community named Ruby that is entirely composed of black residents. This community is formed by a group of ex-slaves who aspire to establish an idealistic society that aligns with their own customs and principles. However, the town becomes increasingly exclusive and self-centered, and is ultimately destroyed by the arrival of a group of women from a nearby convent. The convent represents a "heterotopia," a space outside of Ruby's norms, and its existence triggers a violent reaction from the town's residents. Through the destruction of Ruby and the downfall of its inhabitants, Morrison critiques the idea of radical Black Nationalism and self-imposed segregation, arguing that the only way for black Americans to thrive is through a spirit of openness and acceptance.

Maxine Hong Kingston's *Tripmaster Monkey* explores the concept of "heterotopia" through the character of Wittman Ah Sing, a Chinese American hippie searching for a sense of belonging. Ah Sing's desire to create a cosmopolitan theatrical performance allows for the expression of diverse cultural voices and the formation of a world of mutual interaction, coexistence, and harmony. The Pear Garden constructed by Ah Sing breaks traditional boundaries by linking China and the United States and thereby showcases the heterogeneity of American history and society. Through his adaptation of classical Chinese drama, Ah Sing conveys a message of tolerance and harmony, transcending race, identity, and culture.

In conclusion, this presentation has explored "heterotopias" in ethnic American literature, arguing *Paradise* and *Tripmaster Monkey* as primary examples. Through their use of

“heterotopias,” the authors offer alternative visions of society and challenge readers to critically consider the complexities of identity and the ways in which we construct our own identities in relation to the dominant culture. Ultimately, their works invite readers to reflect on the importance of empathy, understanding, and respect for cultural differences in building a more inclusive and equitable society.

◇第 146 回例会（2023 年 2 月 19 日、Zoom を利用したウェブ開催）
科研(B)プロジェクト「「トランスボーダー文学日系文学」の研究基盤構築と世界的展開」との共催の特別企画
＜プログラム＞
14:00~15:00
特別講演「エキゾチシズムから反オリエンタリズムへ——外国人の見たアジア、アジアから見た「外国人から見たアジア」」
大東和重 氏（関西学院大学教授, 比較文学・中国文学）
15:30~18:00
ミニシンポ「世界文学としてのアジア系（アメリカ）文学」
発表者
山本秀行（神戸大学）兼司会
「David Henry Hwang の＜日本物＞連作劇 *Sound and Beauty* 再読——トランスボーダー性と世界文学的可能性」
松本ユキ（近畿大学）
「フィリピン系文学の世界——Mia Alvar と Lualhati Bautista を中心に」
コメンテータ
濱田麻矢 氏（神戸大学教授, 中国文学）, 干場達矢 氏（日本経済新聞文化部デスク）

特別講演

エキゾチシズムから反オリエンタリズムへ
——外国人の見たアジア、アジアから見た「外国人から見たアジア」

大東和重 氏（関西学院大学）

本例会は、比較文学・中国文学を専門とされ、数多くの御著書・御論文を書かれる大東和重先生を特別講演者としてお招きいたしました。最近、干場達矢氏（日本経済新聞文化部デスク、本例会にミニシンポ・ディスカッサントとしてご登壇いただきました）と共に、古今東西の「翻訳文学」を紹介する Podcast プログラム「翻訳文学試食会」を配信されておられる大東先生だけあって、タイ系アメリカ人作家ラッタウット・ラープチャルーンサップ『観光』、ピエール・ロチ、ラフカディオ・ハーン、中国系アメリカ人作家イーユン・リーというバラエティに富ん

だ文学テクストを取り上げられました。これらの文学テクストを縦横無尽に読み解き、「外国人の見たアジア」すなわちエキゾチズム、「アジアから見た「外国人から見たアジア」すなわち（反）オリエンタリズムといった観点から、問題の核心に切り込んでいかれました。

さらに、そうした文学テクストの精緻な読みによって浮かび上がってきた、以下のような四つの疑問を提起されました。

① 「エキゾチシズムやオリエンタリズムを相対化するような作品に一見なっていても、実際にはそのエキゾチシズムやオリエンタリズムを強化するようなものになっていることはないか？オリエンタリズムは、一方的に見られる側から、自ら行動する主体へと移行しようとする過程において、内在化されていないか？」

② 「アジア系の文学を読んで、「特定の地域が題材・舞台になっていても、そこに必然性が感じられないといったことはないか？」というものです。物語の舞台がタイでなくてもいいのではないか、マニラでも、ホーチミンでも、あるいは長崎や京都でもかまわないものになっていないか？」

③ 「アジア系アメリカ文学の外見的な多様性に対し、そこで扱われているテーマの画一性というようなものが感じとれることはないか？」

④ 「(アメリカの大学の）クリエイティブ・ライティング（コース）がアジア系を含めアメリカ文学作家たちにどのような影響を及ぼしているのか？」

限られた時間ではありましたが、この四つの疑問を中心に参加者との間に活発な議論が交わされ、今後の研究にも繋がる多くの収穫を得ることができました。この場を借りて、香港での長期在外研究にご出発前のお忙しい中、ご講演いただきました大東先生に心より感謝をいたします。

（報告：山本秀行）

David Henry Hwang の＜日本物＞連作劇 *Sound and Beauty* 再読
——トランスボーダー性と世界文学的可能性

山本秀行（神戸大学）

David Henry Hwang の日本を主題とする一幕劇二作品——“The Sound of a Voice”と“The House of Sleeping Beauties”は、1983 年 11 月 6 日に *Sound and Beauty* という統合タイトルの下、ニューヨークの Joseph Papp Public Theater で、香港出身の俳優で古くからの Hwang の舞台仲間 John Lone の演出によって初演された。この＜日本物＞連作劇は、いずれも日本の小説・説話を元にして書かれている。“The Sound of a Voice”が日本の説話を集めた小泉八雲の『怪談』(1904)あるいは安部公房の『砂の女』(1962)を、一方、“The House of Sleeping Beauties”は川端康成の中編小

説『眠れる美女』(1961)を元にして書かれている。この＜日本物＞連作劇は、中国系アメリカ人を描く他の Hwang の劇、特に Chinese American としてのアイデンティティを強く意識した "Chinese American Trilogy"（「中国系アメリカ人三部作」＝*F.O.B*(1980), *The Dance and the Railroad*(1981), *The Family Devotions*(1981)）と出世作 *M.Butterfly* (1988)との間に挟まって、従来はあまり高い評価を受けることがなかった。

初演時に、アジア系アメリカ文学の主流だった *Aiiieeeee!* グループの文学的価値観からすれば、アジア系アメリカ文学・演劇は、アジア人とは明確に異なる、アメリカの人種的マイノリティとしてのアジア系アメリカ人の体験を描くことを主眼としていて、アメリカにはびこる文化帝国主義に抵抗するための政治性が、この＜日本物＞連作劇は希薄であるという点で低い評価を受けるになったことは想像に難くない。また、彼らは文化的真正（cultural authenticity）に重きを置いていたため、アメリカ生まれの中国系二世の David Henry Hwang が、中国ではなく日本を題材にしたことも評価を下げる一因となったのであろう。

本発表では、近年、再評価の兆しがみられる、この＜日本物＞連作劇を、その原作になっている川端康成やラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が日本の自然や風土の中に見出したトランスボーダーな「美」に注目し、Elaine Scarry が *On Beauty and Being Just* (1999)において指摘した、近年の人文学における「政治性」重要視の傾向の中でなおざりにされてきた「美」の再評価の必要性に従い再読し、その「世界文学」的可能性を探求した。

フィリピン系文学の世界
——Mia Alvar と Lualhati Bautista を中心に

松本ユキ（近畿大学）

本発表では、フィリピン系の作家が、英語圏（主にアメリカ）およびフィリピンで出版した文学作品を取り上げ、フィリピン系文学の世界を探求した。今回は主に、1970 年代から 80 年代のマルコス政権における戒厳令下のフィリピンを、一人の女性、そして母親の視点から描いた小説に焦点を当てることとした。

一つ目の考察対象は、フィリピン系アメリカ人の作家ミア・アルバール（Mia Alvar）の短編集のタイトル作である中編小説の"In the Country"である。更にその比較の対象として、フィリピンを代表する現代作家である、ルアールハティ・バウティスタ（Lualhati Bautista）の小説 *Dekada '70* を取り上げた。この作品はタガログ語で書かれているが、幸いなことに『七〇年代』として邦訳が刊行されており、日本の読者も読むことができる。

二つの作品を読む前に、まずは、フィリピン系あるいはフィリピン系アメリカ人の作家が英語で書いた文学作品、そしてスペイン語やタガログ語などで執筆されたフィリピン文学で今日日本語の翻訳で読むことができる作品をいくつか紹介し、グローバルな読者層にアクセス可能

となったフィリピン系文学の世界を概観した。

本発表で取り上げたアルバールとバウティスタは、属する世代も言語も異なるが、双方ともフィリピンにおいて政治的な混乱を経験した 1970 年代からの 10 年間に焦点をあて、一人の女性そして母親の視点で物語を語っている。そこにはこれまで家父長的なイデオロギーに支配されていた歴史や文学の世界を女性の視点で描き出し、書き換えていこうとする姿勢を見て取ることができる。今後、フィリピン系文学は、フィリピン文学、アジア系アメリカ文学、ディアスポラ文学、世界文学、翻訳文学など様々な枠組みの中でより広く読まれていくことが期待される。

本発表の約 1 週間前、2023 年 2 月 12 日に、ルアールハティ・バウティスタは 77 歳でこの世を去った。今後も彼女の作品が世界中で読まれ、その文学的遺産が引き継がれていくことを心より願っている。

◇第 147 回例会（2023 年 3 月 11 日、Zoom を利用したウェブ開催）
科研(B)プロジェクト「「トランスボーダー文学日系文学」の研究基盤構築と世界的展開」との共催の特別企画

＜プログラム＞
第一部：13:00~14:00
Martin Manalansan IV (University of Minnesota)
“Queer Encounters with Colonial Mentality”
Chair: Rie Makino (Nihon University)
Discussant: Myles Chilton (Nihon University)

第二部：14:00~16:00
Nathaniel Preston (Ritsumeikan University)
“The Entangled Self: Dōgen in Ruth Ozeki’s *A Tale for the Time Being*”
Thomas Brook (Otemon Gakuin University)
“‘American-Asian Literature’? Situating Levy Hideo’s Works Within and Beyond Japan”

“Queer Encounters with Colonial Mentality”

Martin Manalansan IV (University of Minnesota)

Colonial mentality is often described as “internalized oppression” caused by colonization. This presentation tracks the emergence of this concept in the decolonizing social science literature both in the Philippines and in the United States. I locate colonial mentality’s continued persistence and appeal by looking at present-day dialogue between these traditions of decolonizing social sciences (primarily, psychology) such as Sikolohiyan Pilipino and Filipino American Psychology. At the heart of the analysis is a double queer critique of both the concept

and the decolonizing efforts in the two traditions by deploying a queer critique. Queer critique here is not merely about non-normative sexualities but about interrogation of the unwitting normalizing tendencies of these forms of decolonial efforts that are tethered to the nation, primal origins, nativism, and authenticity.

Response to Martin F. Manalansan IV, "Queer Encounters with Colonial Mentality" Asian American Literature in Japan Association, 147th Meeting, March 11, 2023

Myles Chilton (Nihon University)

In "Queer Encounters with Colonial Mentality," Martin F. Manalansan IV argues that the deployment of the term 'colonial mentality' has functioned as an all-too-limiting idiom, normalizing a set of traits and behaviors that ultimately precludes a richer, more reflexive critical understanding of Filipinos and the Filipino diaspora. Manalansan stages his critique using a queer analytical framework, stressing that in this case queerness does not refer to non-normative sexualities and genders, but as a way of disrupting normative conceptualizations, and of overcoming the commonsense and non-reflexive scholarly and vernacular uses of the term.

Manalansan traces customary uses of 'colonial mentality', in its definitions as "internalized colonialism or a perspective of Western superiority and Filipino inferiority," and "internalized oppression characterized by a preference for anything American and a rejection of anything Filipino," as well as its provenance in Frantz Fanon's diagnosing of the psychological violence on colonial subjects. Manalansan offers evidence of the insidious extent of Spanish and American colonial residues in the Philippines, and how this has resulted in calcifying "colonial mentality as intrinsically Filipino." This discourse emerged from Filipino scholars in the period after independence from the U.S. who were attempting, along with post-colonial scholarly movements around the world, to understand how colonialism's traumas characterized the nation. Filipino psychologists in particular focused on identifying native behaviors and attitudes, and on decolonizing and nativizing their discipline.

While Manalansan acknowledges the worthiness of Filipino scholarly efforts to diagnose and describe the very real harms and marginalizing effects of colonization, he also seeks to queer the deployment of colonial mentality as the normative diagnosis for "all Filipino and Filipino American problems and miseries" so that it can account for a range of socio-cultural and religious differences. Reliance on the phrase colonial mentality ends up essentializing certain concepts, treating them as 'pure' and unique when they are not, and leaves reifying binaries in place that construct Filipino-ness as a false national consciousness.

If the aim of discussing colonial mentality is, according to Manalansan, to ultimately eradicate it, what would that entail? Would it mean a return to a pre-colonial past, to decolonize, to indigenize? Wouldn't that entail a kind of internal re-colonization – Fanon's "borrowed colonialism" – with dominant groups exercising hegemony over the numerous minority and dispossessed groups in the Philippines? What would their national consciousness consist of?

Colonial mentality's other conceptual blind-spot is the assumption that subjects passively accept and internalize the colonizer's values and ideologies. In critiquing the idea that colonial mentality forms itself in a linear process, Manalansan also cites criticisms of the idea of hybridity as a "deleterious 'mixing' that is always a negative and passive process" enacted on a "pure, pre-colonial state of affairs." As Martin Manalansan teaches us, it also points to the urgency of finding a "more critical yet generous portrait of Filipinos as active agents of history and vital participants in the making of their own future."

"The Entangled Self: Dōgen in Ruth Ozeki's *A Tale for the Time Being*"

Nathaniel Preston (Ritsumeikan University)

Studies of Ruth Ozeki's 2013 novel *A Tale for the Time Being* often mention something about Zen Buddhism, which figures prominently in its plot. Some scholars briefly note the similarities of non-dual states in Zen and quantum mechanics, while others use that non-duality to destabilize fixed categories related to various social problems depicted in the novel. Those that give sustained attention to Ozeki's connection with the 13th-century Zen philosopher Dōgen have done so only with regard to meditation practice or the details of monastic observance. Dōgen's philosophy, as expressed in his writings, has not been fully explored in relation to the novel's meaning.

Yet Dōgen is key to this text, his name being mentioned repeatedly and his concept of "being-time" or *uji* (有時) informing not only its title but also the primary concerns of the characters Nao, Ruth and Jiko. Ozeki herself serves as a priest of the Sōtō branch of Zen initiated by Dōgen, and she was ordained at the temple Eiheiji, which he founded.

While the philosophy expounded in Dōgen's *Shōbōgenzō* challenges our capacities for understanding, we find in it several concepts with a compelling relevance to Ozeki's novel. One is the notion of *jiko* (自己) as a universal self that embraces all instances of being-time. In the novel, this idea is reflected in the name of the Zen master Jiko Yasutani, whose name seems to dangle between the meanings of "benevolent light" (慈光) and "self" (自己), much as a photon can be construed both as a particle and as a wave. As a universal self, Jiko enfolds her disciples Nao and Ruth in a process that Dōgen refers to as *kattō* (葛藤). By writing each other's stories, the three characters enter into an entanglement that allows Ruth and Nao to transcend the troubling circumstances that surround them and move toward a more positive future.

These two concepts are unique to Dōgen. Buddhism normally denies the existence of an inhering self and views the entangling vines of *kattō* as irrelevant encumbrances. Dōgen's philosophy thus seeks to shake up conventional Buddhist thought, and Ozeki likewise uses his ideas to challenge our commonly held views about the universe and our place within it.

"'American-Asian Literature'? Situating Levy Hideo's Works Within and Beyond Japan"

Thomas Brook (追手門学院大学)

Levy Hideo, the pen name of Ian Hideo Levy, born in California 1950 to parents of Jewish and Polish ancestry, is a pioneering writer of contemporary transnational literature written in the Japanese language. The question of how transnational writers of Japanese can or should be categorized is frequently raised in contemporary literary research. There is no equivalent to "Asian-American Literature" for non-Japanese writers who write in Japanese, but rather terms such as "Japanophone Literature" (*Nihongo bungaku*) and "Border-Crossing Literature" (*ekkyō bungaku*) are used instead, which tend to emphasize the writers' exteriority, or non-nativeness, rather than their specific ethnic background. In this presentation, after first foregrounding the issue of categorization via Levy's own critique of it in early writings, I attempted to reassess the question of how he and his works should be situated.

Levy's debut novel, *A Room Where the Star-Spangled Banner Cannot Be Heard* (1987-1992), set in 1960s Tokyo, includes an encounter between the 17-year-old American protagonist and a slightly older young Japanese woman who attempts to ascertain his identity. I showed how this scene exposes the way in which the authority and desire to categorize individuals is linked not only to linguistic competency but also one's affiliation with the dominant ethnicity, i.e. how "Japanese" somebody is. Additionally, in manifesto-like essay "Like a Half-Caste Kid" (1992), Levy discusses the affinity he feels with writers of mixed Japanese ancestry, saying that for them becoming an adult usually means having to "choose" which culture they affiliate with primarily—this is the "solution" to the issue of their in-betweenness—and that to write "like a half-caste kid" means to occupy the indeterminate space of adolescence by expressing two cultures in the same text.

Reading the above texts as examples of Levy's resistance to the act of ethnic categorization, I then considered the fact that several common themes can be seen in the writings of Levy and other Japan-resident writers with an American background both in modernity (Lafcadio Hearn) and the present (Gregory Kherznejat), in addition to Taiwan-born writer of Japanese Li Kotomi. Finally, I considered the commentary of Pearl Buck in Levy's short first-person narrative "Going Native" (2016) and showed how the text demonstrates the process of thought involved in the narrator's judgement of Buck's literary legacy. I concluded that while categorizing is a necessary part of scholarly work, and that it is important to recognize the specific cultural/historical background of Levy and his work as "American", his works and words also prompt us to reflect on our own desires to categorize or name in a certain way.

事務局だより

＜新入会員の紹介＞ （敬称略） 楠本祐子（アメリカ在住）

＜会費納入のお願い＞ いつも会員の皆様には、会費を納入いただきましてありがとうございます。*AALA Journal* No.28 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

＜住所等変更について＞ 住所、所属、メールアドレス等に変更がありましたら、ご面倒ですが、下記事務局までメールでお知らせいただきますようお願い申し上げます。

aala.jp.office@gmail.com

＜*AALA Journal* バックナンバー購入のお願い＞ *AALA Journal* バックナンバー（在庫僅少の No.1 を除く）を 1 部 1,000 円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

＜ジャーナルの執筆者負担＞ ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額相当分のジャーナルを送ります。最低額 10,000 円（1,000 円×10 部)以上をお願いしておりますので、お忘れなく納めていただきますよう重ねてお願い申し上げます。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです（振込料金は振込者負担となります）。

[郵便振替口座番号 01180-1-75183　加入者名　アジア系アメリカ文学会]

アジア系アメリカ文学会
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内
TEL&FAX: 078-803-5543

AALA NEWS No.62　　2023 年 7 月 16 日
編集担当：松本ユキ